



日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page http://www.nichiro.org

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



オレンブルグ～サラトフでの「日本週間」に参加して

松本 泰男

10月7日から15日にかけて日口交流協会の文化交流使節の一員として、古都オレンブルクとサラトフでの「日本週間」に参加させて頂きました。メンバーは千葉麻里さん(きもの、風呂敷、ちぎり絵、茶道)、小倉隆子さん(折り紙)、剣術指南の望月繁さん、そして私の計4名です。

成田を昼過ぎに離陸して約9時間、中継地点のモスクワ空港に同日夕刻4時過ぎに到着。オレンブルク便に乗り継ぐまでの間、日本大使館の方々や市内で夕食の機会を頂き、今回の使節団でも認証して頂いた「ロシアにおける日本年・2018」や現在の日露関係などについて興味深いお話を伺うことが出来ました。

高橋様に空港まで送って頂き、深夜1時の便でオレンブルクへ。2時間に満たない飛行でしたが現地時刻は2時間進み、すでに5時。何か奇妙な感じです。地元オレンブルクの国立大学で働くオルガさんの出迎えを受けホテルへ。オルガさんは日本語を勉強していて、この後様々な場面で通訳として助けて下さいます。他の都市同様オレンブルクでも日本に対する関心が非常に高く、オレンブルク国立大学で日本語教師を務める久坂さんや彼女の生徒さん達と食事や市内散策・ショッピングを、日本語を交えて楽しみました。

9日朝、日本情報センター長リュドミラさんの案内でオレンブルク国立大学の学長を表敬訪問。学長もセンター長も女性で、次の訪問地サラトフ同様ロシアでの女性の活躍振りが覗えます。午後からいよいよ私たちのプログラムのスタートです。まず、大学の図書館で望月さんによる剣術指南。剣術と剣道の違いなど歴史的な解説や参加者を交えての実技披露に皆さん大満足です。夕方から近くの和風レストランで千葉さんの茶道教室。ここでも皆さん大変興味深く、存分に楽しんで頂きました。全員分のお茶を点てるのに千葉さん以外のメンバーも厨房の脇で汗だくです。翌10日は小倉さんの折り紙、千葉さんのちぎり絵、風呂敷と着物の着付けです。折り紙が旨く出来たときの子供達の嬉しそうな顔を見ると、はるばるやって来た甲斐があったと思ひ、実に感動的でありました。小倉先生は席から席へ飛び回って大奮闘。我々も汗を拭いながら生徒さん達のお手伝い。

オレンブルクでは茶道と着付けの教室として和風レストランが使用されましたが、催しの後に振る舞われた夕食がどちらもお寿司(の様なもの)。残念ながら4人とも口に合いません。具にチーズが使われているのです。ロシア風の寿司はこうなるのかと、大変勉強になりました。個人的な感想ですが、料理に関して申し上げれば、どこでもスープ類が大変美味しかったです。ホテルのバイキングでは何杯もおかわりをさせて頂きました。

11日、早朝モスクワ経由でサラトフへ。当地で日本週間を主催する露日協会サラトフ支部のマリーナさんのお出迎え。雄大なヴォルガ河畔散策後、軽食をはさんで人類初の宇宙飛行に成



ガガーリン像の前で

功したガガーリンがその時に着地した正にその地点を遺すガガーリン・パークへ。記念塔とカプセル、テレシコワさんなど歴代宇宙飛行士の肖像以外何もない茫漠とした野原。背筋がゾクゾクするほどの感激でした。ガガーリンが空から降ってきたとき地元の人達は宇宙人がやって来たときとびっくり。その宇宙人がロシア語をしゃべったので2度びっくりしたとの事でした。(元々お隣のカザフスタンのどこかに着地の予定であったそうです。)夜はマリーナさんのご自宅で夕食をご馳走に。自家製のワインやご自宅で採れたトマトや野菜を使った、心のこもったロシアの家庭料理で実に暖かいおもてなしを頂きました。

翌12日からオレンブルク同様3人の先生方は大活躍です。モスクワから駆けつけてくれた千葉さん旧知のターニャさんが通訳として大奮闘。午前中の折り紙と剣術の後、休む間もなく「日本映画祭」の開幕式へ。マリーナさんの開幕挨拶の後、日本からの交流使節として4人が紹介され、続いて剣術披露。黒澤明と宮崎駿は映画の神様と崇められています。

13日夜、全てのプログラムを無事終えた後、市内の劇場に案内され、地元のプリマドンナが主演するバレエ「少女と死」を鑑賞。座席数1000の劇場のこの日の公演の料金は1階の特等席で千円程度とのことでした。サントリーホールの様な規模(2千席)では無いけれど、映画で見るとような豪華なシャンデリアに照らされるホール。ベルリンフィルやウィーンフィルではないけれど、共感に満ちた地元オーケストラの暖かい響き。この町の人々の豊かな日常生活をととても羨ましく思います。

このサラトフでの事。私達が道を歩いていると、日本流に言えば女子高生らしい制服姿の何人かとすれ違いました。3人の和服姿を間近に見て感激したのでしょうか、胸近くに拳を握りしめ小躍りしながら、一生懸命押し殺した様な声で「クラサター!(きれいー!)」と叫んだのです。「和服姿ってそんなに美しいんだ…」一瞬の出来事でしたが、一生の思い出になりそうです。また、何人かの方々から日本語のサインを頼まれましたが、「平成二十九年十月何日、日本の何某」などと、この時ほど悪筆を恥じたことはありません。

最後に、ご多忙にもかかわらず長年にわたって日露文化交流のボランティア活動にエネルギーを注ぐ皆さんの熱意に心底敬服致します。残念ながら、幼いときからある国に対する憎悪だけを植え付ける様な教育を行っている国もあります。このプログラムに参加した子供達が将来この国を引っ張って行くことを思うと、この様な文化交流の重要性・意義深さに身の引き締まる思いです。少し感性のアンテナが伸びたような感覚で15日帰国致しました。貴重な経験の機会を与えてくださった関係各位に感謝いたします。有り難うございました。